

郷土を知る
むかしむかし

昔々の

そお市

第43回

活火山が 作り出した曾於市



生涯学習課 文化財係 ☎ 0986-76-8873

活

火山と聞いたたら、すぐに桜島や開聞岳、霧島連山

を想像されると思います。これらは県を代表するシンボルであり、多くの恩恵を与え、信仰や精神的支柱となる一方、畏怖の対象でもあります。

活火山とは過去1万年以内に火山活動が確認された火山のことで、国内には北方領土や海底火山を含め129の活火山があります。世界中の活火山の7%が日本にあり、まさに日本は火山大国といえます。

南九州は特に火山由来の火砕流や火山灰の影響を大きく受けており、あちこちで見られる厚い地層の断面より、過去の火山活動の痕跡がうかがえます。

曾於市は始良カルデラ由来の入戸火砕流堆積物（シラス）が最も厚く、霧島山系・喜界カルデラ・桜島の火砕流堆積物や火山灰が20層ほど分厚く堆積し、長期にわたる浸食で平地が少なく水源も少ないといった特徴があります。市内でも財部町では霧島御池由来の火山噴出物が目立ち、大隅町最南端

の地域では、まれに開聞岳の火山灰が見られます。

火山活動は人や家畜、農作業に甚大なダメージを与え、農地に降り注いだ火山灰や軽石を人力で取り除く「ボラ抜き・ボラ起こし」と呼ばれる過酷な作業が行われていました。

火砕流や火山灰は人々の生活を脅かし、一気に不毛の地へと変えてしまえますが、過去には文化の転換期となったり、考古学の研究では大きな役割を果たす場合があります。

考古学では火山灰や地層が年代の特定につながり、堆積した火山灰は当時の生活をそのままの状態で見ることが出来ます。現在では常識となつている縄文時代と弥生時代の時代区分は、堆積した火山灰の上下や、遺物が出土した層位で時代の新旧が判明しました。

南九州に住む人たちは、火山地帯という逆境を乗り越え何千年も生活が続けてきました。長い歴史の中で育まれてきた特有の文化や技術・信仰は現代でも根強く生き続けています。



市役所本庁から見た霧島山系

